

中川根ふる里通信

= 第20号 =

編集・発行・モアラブ中川根
 連絡先 〒428-03
 静岡県榛原郡中川根町上長尾 857-6
 ふる里通信係
 郵便振替口座
 <名古屋> 7-81556



冬ざれの山犬段

吹きぬける北風の中、ブナもミズナラもヒメシャラも
 春への準備は調い、雄々しくそびえておりました。

新年明けまして

おめでとうございませす



「今年こそは」の決意も新たに、益々ご清祥にして新年をお迎えのこゝとご推察申し上げます。

さて前号でご紹介いただきましたように、この度中川根町教育長に就任させていただきました。

もとより、浅学の私ですが、郷土のため精一杯努める所存でございますので、今後一層のお力添えのほどお願い申し上げます。

「今、ふる里は」ということで、この通信をとおし近況を伝えていただいておりますので、すでにご承知のことと存じますが、今、ふる里には過疎化・高齢化の波が押し寄せてきております。

若い人達の都市への流出は、地場産業の後継者不足をきたし、高齢化率は二十一%に達し、かつて十一校あった小学校も今は三校となり（児童数四六六人）また一人暮らしの老人家庭、老人夫婦の家庭が年毎に増してきております。

こうした状況の中にあつて、「水と緑と美しい空気に恵まれた町中川根」に一段と生気をみながら、そこに住む一人一人が「生まれ生きてよかつた」と実感できるようなふる里創生にと政治、経済、教育、それをその学で努めている昨今であります。

また近年高齢化・情報化・国際化への対応が喧伝されてきました。これと肩を並べるかのように「生涯学習」の時代が到来いたしました。私たちの町でも

- ◆若者が誇りと希望をもって活動する町
- ◆心の融れ合いのある生活ができる町
- ◆生きがいを感じ安心して定住できる町

この三つを目標に、その推進の核を「健やかな家庭づくり」において出発いたしました。

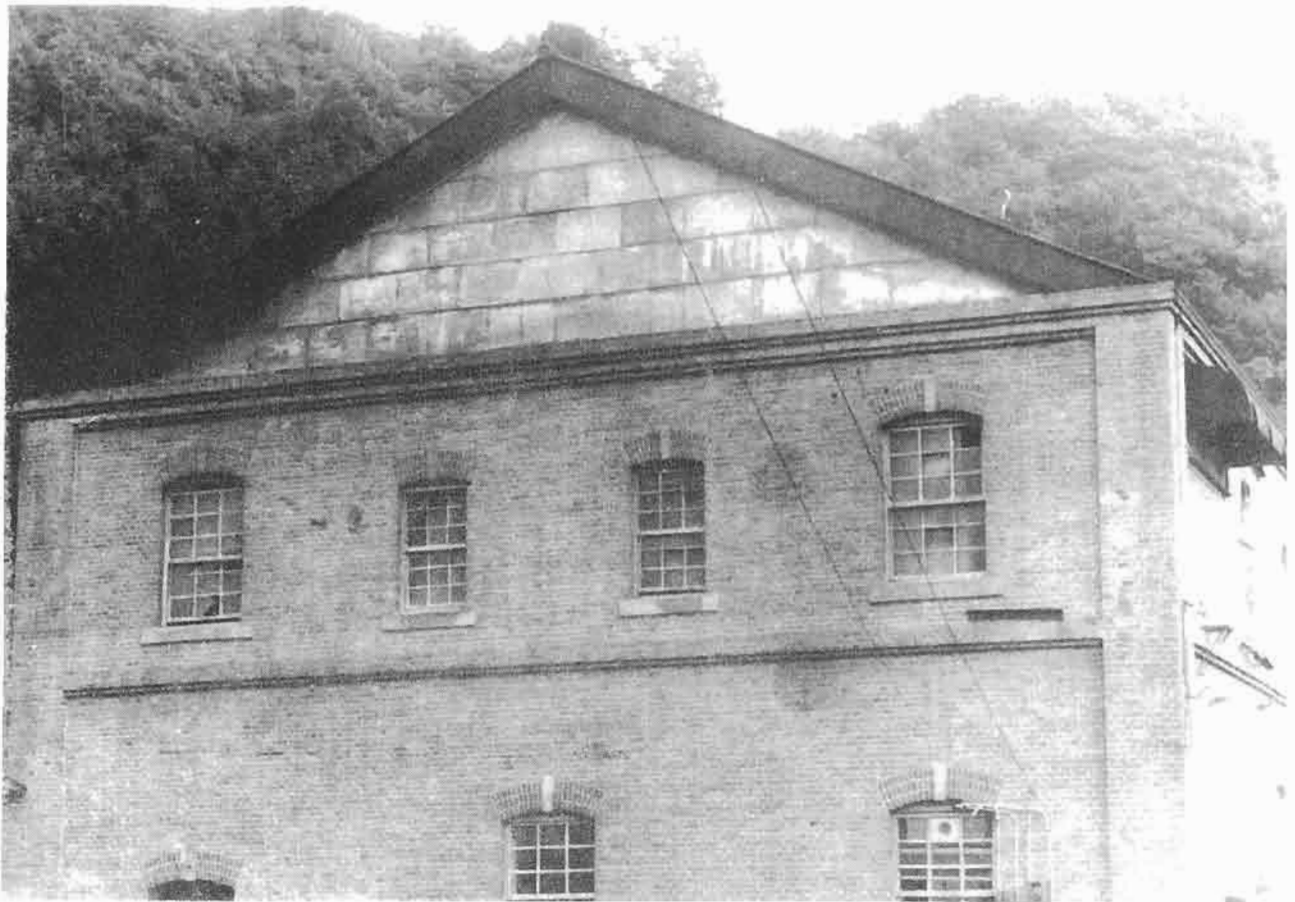
遠くふる里を離れておられましても、生まれ育つた我が家、そして中川根に度々訪れてください。また、ふる里創生のいいアイデアがありましたらお教えください。

皆さまの益々のご健勝とご多幸を祈りつつ。

中川根町教育長

堀畑 和巳（下泉）





旧東海紙料 地名発電所 ふる里の建物

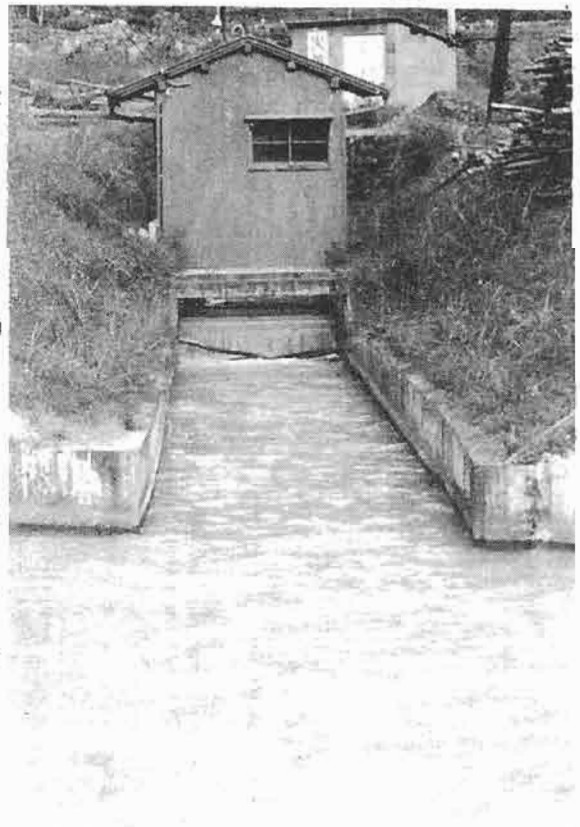
東海紙料(株)[現東海パルプ(株)]の自家発電用として明治43年

(1910)に建設されました。建設費17,000円。平屋建、切妻造、トタン葺。外壁をレンガ、内を木造の二重構造にして、空気層を設けるように工夫されています。床面積274㎡。

現存している明治時代の発電所では貴重な建物となっております。

なお昨年発行された「静岡県の建築物」という本にも中川根町からは地名発電所と千葉山智満寺山門が選ばれております。

写真右側は地名発電所水路の一部です。写真中央の水が出ている所は昭和36年地名発電所が閉鎖されたため、それまで水路より地名の田畑へ農業用水を取っていたのが、中部電力(株)塩郷ダムより笹間ダムへの送水管(トンネル)より水を取り入れる為の用水路です。現在発電所水路及水槽のあった所は道路や公民館、保育園となっております。そして右側写真の場所はプールとなっております。今後もふる里の建物を紹介して行く予定です。



ふる里通信の皆様へ

一月は行く、二月は逃げる、三月は去る、等と誰が言ったかと思いはがら、しう何年もの季節を過してきます。そして今年も私達「四季の里」の女性達の忙しい春がやって来ます。

「今日からよむぎの買取りを行います。夕方四時までに、四季の里まで持って来て下さい。」と有線放送が流れると、町内のあちこちから、にこにこ顔のお年寄や、幼子らの手を引いた若い主婦達がビニール袋に、つま取った、よむぎをさげて集まって来てくれます。

こんなお店を始めても、どうなる事やら、皆様に御迷惑をおかけするようなら事にならないかと思ひ悩んでおりました。あれから四年過ぎました。地元の方々や中川根出身の町外の皆様の温い見守りの中、五年目に入った「四季の里」大きな根を張り、葉をのびし、みごとな花が咲きまわりました。

お正月には十日間休業を致しておりますので、せっかく皆様が帰省されても、お目にかかれませんでした。役場の方へ苦情が多数寄せられたという事を聞きましたので、私達一同、来年からお正月にも開店する様に話し合いを致しました。

どうぞお忘れり下さい。

ふきのとう、わらび、ぜんまい、竹の子、タラの芽、お茶、しいたけ、栗、柿、いもがら、大根、切干、わさび、山芋、干柿などが、手打ちそば、こんにやく、よむぎパンなどの手造りの商品間をめぐって一年中くり返し、お店をにぎわしております。都会へ都会へと年々人の流れが行く中で、地元に残された者、少しでも農産品を現金に変え、生活をどうなおす事が出来たらと、一にぎりの主婦が見た夢がかないつつあります。

初心わすれずに、商魂に流されず、地元の方々を大切に、遠くの方々に愛される四季の里造りにはげみたいと思えます。

四季の里のお母さんより

藤森 文江 (八中)

スギ花粉症 = 春への関門 =

常緑針葉樹の杉の木からは、良質の建築材などがとれ需要が伸びていますが、育年が長く、後継者不足から、林業の存続が危ぶまれています。ふる里の山々は杉、松の美林が続いています。

緑の杉山が季節ごとに色が変わることをご存知ですか？初夏に新芽が伸びますから黄緑に、夏から冬にかけては濃緑に、正月ごろから4月ごろまで茶色に変化します。「山が赤くなったから、アレルギーの季節が来るな」と感じます。茶色に見えるのは、花もありませんが、葉も少し茶色になっています。

2月中旬から4月まで、少し風のあるあたたかいよく晴れた日(雨あがり)山からけむりが立ち上がり「なぬ、山火事」と思えば、杉の花粉が飛び回っているところでは、雨つぶにも花粉が交って屋根はきたなくなります。

町の人々も高い比率でアレルギー症状が出ています。= アジミ、鼻つまり、結膜炎、ぜん息。私も20年来のスギ、赤マツ、ネコのアレルギーのお付き合いをしていますので、苦しみはよく判ります。

近年になって抗アレルギーの良い薬も研究されています。昨春は史上最大の花粉量、今年は昨年の50%増なんて予報も出ておりますが、どうでしょうか。

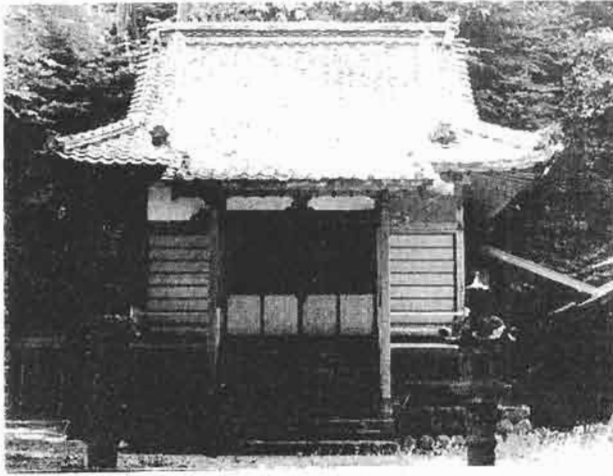
花粉症の皆様、花粉に負けない様、体カ気カで頑張ってください。



佐 沢 薬 師

久野脇地区の裏山を尾根伝いに約十五分、三津間地区からは約十分、小鳥のさえずりを聞きながら杉木立の中を歩いて行くと、間口四間、奥行三間の、こじんまりとした薬師堂につきまします。妻薬師、ひょうとり踊り等で知られる佐沢薬師であります。

お堂は昔、三津間地区前田さん横にありましたが、元龜年間（一五七〇〜一五七三）武田信玄によって焼打ちにあい、如来像もお堂も焼失してしまいました。慶長九年三月（一六〇四）杖沢（標高約六〇M、ハキロほどの山中）に再建されたといわれています。が、あまりに人里はなれていたので、大正十二年一月、現在の地に移されました。



御本尊は薬師如来像で江戸時代初期の作といわれていますが、作者は判っていません。蓮華の台座の上に座した木像で、高さは約三六センチ、左手に薬壺をもっています。脇侍として、日光、月光の両菩薩にたがえ、さらに左右一列に十二神将が守っています。このお薬師様は大変美男で、妻薬師とも愛称されており、願をかければ、良いお嫁さんが授かるともいわれています。

毎年正月七日から八日の朝にかけて例祭が行なわれていますが、特に十千十二支の庚子の年、六十年毎に御開帳の特別大祭が行なわれます。安永八年（一七七九）智満寺十四代祥山和尚により御開帳がなされてから、天保十二年庚子（一八四〇）明治三年庚子（一八九〇）昭和十五年庚子（一九六〇）この次の開帳は二〇二〇年となっています。

前回の御開帳の時も近郷近在の老若男女を集めてにぎやかに大祭が行なわれました。

佐沢薬師堂は千葉山智満寺の飛び地境内となっております。

七日の夜には地区中の人々が薬師堂に集まり、あかあかと燃えあがる焚火をかこんで老若男女、互に手とり、肩を組み、足を踏みなうして歌い踊り、明け方まで村中安全、家内無事を祈願するのだといわれますが、近年は若い男女も少なくなり、踊りもすたれているそうがあります。この踊りが「ヒョウドリ」とよばれているもので、火除けとか、火踊りとか、雪踊りとかいわれています。昔雪が降り続いて困ったとき、この踊りを踊って雪の降らないうちに祈ったのが始まりだとも伝えられています。

歌詞は、年々歌い継がれ、作り変えられてきたようで、若い人達の中では歌詞を知っている人が少ないといえます。町の文化財にもなっており、大のいとほみの歴史として、林火火のよいうに明るく、後世に引き継いでほしいものです。

心よく持て峰の松、心わるいと風にあう
心わるくは、こさらぬが、立場悪くて風にあう
・東山から西山へ、青い女人の影がさす
青い女人の影ではなくて、ま青い羽織を着た殿御



入植生活

久野腸の山田よねさんは、昭和十八年三月、川根開拓団の第二陣として満州に渡った。夫嘉一さん(当時三十一才)と、幼い娘二人、それに夫の弟妹三人を連れての移住だった。

開拓団への参加は嘉一さんが一人で決めたことだ。ある日よねさんは帰宅した嘉一さんから突然、「満州へ行くぞ。」と言われた。そのころの山田家には小さな野菜畑が一面あっただけ。酒も飲まず、働き者だった嘉一さんは、毎日のように材木の運搬作業に出かけて一家の生活を支えていた。

よねさんは積極的に満州に行きたいと思っただけではない。実兄が「満州国」の新京(長春)にいた安心感と実家の母の強い勧めで心を決めた。家と土地はすべて処分しての移住だったが、二度と戻れないという悲壮感はなかつた。満州での暮らしはよねさんの想像を超えたものだった。

冬の寒さは内地とは比較にならない。零下三口度を超えるような日は、うっかり素手でバケツを持つと音を立てて手が張り付いた。あわわて解そうとする、皮がむけてしまふ。そんなときは、逆によく握って体温を伝えると楽に離れた。

夜になるとオオカミが出没した。開拓団が飼育している豚を狙って、人家の軒先までもやって来る。大陸の広野に響くオオカミの鳴き声は不気味だった。

入植してから三カ月後の六月二十二日、二歳の次女の急死した。発熱、下痢、おう吐が三、三日続き、二十数キロ離れた白城子の満鉄病院に連れて行った。



特集 満州移民 その3

ときは、もう手遅れだった。病名は急性腸炎。「満州になど来なければ、死なせはしなかったよねさんはそう思うと、悔やんでも悔やみきれなかった。日本に帰りたいたい。」そう言って、何度も嘉一さんを困らせた。

昭和十八年、入植二年目を迎えた川根開拓団は順調に経営を進めていた。山田さん一家ら、新たな入植者を迎え、団員は三百人を超えた。初年度の前棉山昭、後棉山昭の二集落に加え、新たに一棵樹、東風水山にも入植した。十九年には、さらに八つに増えた。

十八年秋、入植地の東を流れる洮兒河がはららんとした。雨は一滴も降らないのに、現地の人たちは「増水だ」とわめき、また青い作物を収穫し始めた。四、五日後には数キロ離れていた入植地にも水が追ってきた。あわわて収穫を終えると、あたり一面の湖と変わり、何百科とも知らぬ水鳥の遊び場となった。

「浸水すれば、強すぎる土中のアルカリ分が下に沈む。来年は豊作だ。」団員たちはそう言って翌年の耕作に思いをはせた。湖は一カ月後、厚い氷の床に変わった。



夜はオオカミ出沒 遠い病院 次女急死

われら義勇軍

われ等は若き、義勇軍

祖国のためぞ、鏝とりて

万里涯なき、野に立たむ

いま開拓の、意気高し

いま開拓の、意気高し

(星川良夏作詞・飯田信夫作曲)



満蒙開拓青年義勇軍、この世界史上に類例を見ない少年だけの武装移民に参加したのは、まだあとけなさいの残る十六十九歳(数え年)の若者たちだった。

昭和十二年、政府は満州開拓の推進と、ソ連国境の警備を目的に、義勇軍制度の創設を決定した。三年間、満州の訓練所で農業技術と軍事教練を学ぶというこの制度は、将来の開拓民養成を兼ねて、徴兵前の少年を実質的に国防の第一線に立たせようというものだった。

義勇軍に参加したのは、農家の次、三男が多かった。貧しい山村に生まれ育った彼らは、貧困から抜け出し、将来、一人前の「鏝の戦士」になるのを夢見て、親元を離れて行った。

義勇軍要員として静岡県が送った少年は、昭和十三年以降で約二千三百人、全国第六位になる。うち二十九人が中川根村の出身だった。

昭和十六年夏のある日、上長尾国民学校の高専科二年だった高木務さん(高郷)は、満州から一時帰国した八木道之助さんに、義勇軍への入隊を勧められる。小学校の先輩だった八木さんは、十四年、中川根村から初めて

親元離れ 武装移民

義勇軍に入った人だ。

義勇軍での生活や若者の使命を熱っぽく説く八木さんの話は、赤い夕日の満州に、あこがれていた高木さんの心をかき立てた。子供心に、三年間、がんばれば、一人前の開拓団員として十町歩の土地を与えられる、というのも魅力だった。

高木さんは七人兄弟の長男。家族は多かったが、それなりの田畑はあり、食べるに困るという心配でもなかった。両親は当然、「長男のお前がそんな遠くへ行くことはない」と反対した。だが、分村計画が具体化し、村民の満州熱は高まっていた。教師も口添えしてくれ、両親も認めざるをえなくなる。

翌年春、高木さんは、国民学校の同級生ら三人とともに義勇軍に入隊した。三カ月の訓練を経て、満州に。

配属されたのは黒河省黒河の大額訓練所だった。黒河は黒竜江(アムール川)のほとり、川をはさんでソ連のブラゴベシヤンスクと対峙する。文字どおりの国境の町だった。

訓練所の生活は、一日がラッパで始まり、ラッパで終わる。軍隊並の厳しさだった。自由時間は夕食後、就寝までの間だけ。午前中は講義、午後は農業実習。その間に軍事教練があった。教官は、土地を確保するためには、敵が来たら戦わなくてはならない、と教練の必要を説明した。

まだ親に甘えたい年ごろの少年たちだけに、当然、脱落者も出た。高木さんにとって、いちばん故郷

次ページへ

国防の第一線に少年 軍隊並みの厳しさ

が恋しくなるのは、月夜に一人で歩哨に立つときだった。日本で見ると同じ月の光は、少年にはるかな故郷を思い起こさせた。

そんな寂しさを慰めたのは、家族や友人との文通だった。支給されるはがきが足りないときは、シラクバの皮をはぎ、適当な大きさに切って代用した。一週間に一度の休日は、仲間とシカ狩りや魚釣りを楽しんだ。貴重な息抜きの間だった。

二十年五月、高木さんは三年間の訓練所生活を終え、暗れて川根開拓団の一員となった。自然と胸に迫るものがあった。「がんばって、いつかは親を呼び寄せよう。」だが、高木さんの期待とは裏腹に、開拓団にはすでに崩壊の予兆が表われていた。

押し寄せせる戦火



昭和十九年、日本ではすでに米軍機による空襲が本格化していた。それまで平穏だった満州の川根開拓団にも、少しずつ戦争の影は忍び寄ってきた。

団員に召集令状が舞い込み始めた。「開拓団は兵隊と同じように、日本を離れ、国のために汗水流して働いている。召集はないだろう。」そう信じていた団員たちの期待は、次々に裏切られていった。

川根開拓団のリーダー、板谷壯吉団長のもとにも、召集令状は届いた。「三人の子どもを抱えて、これからやっていけるのだろうか。」板谷団長の妻せつさん（水川）にとっては、団だけでなく、一家の大黒柱、不安を感じていた。『じきに帰れると思うので、心配ないよ。』

団長にも召集令状



そう慰める夫の言葉を信じるしかなかった。軍の指示で、応召者の送別会も、見送りに禁じられた。リュックサックを肩に、家を後にする夫の姿を、せつさんはひっそりと見送った。

数カ月後、せつさんは子どもを連れて、チチハルの部隊にいる夫に面会に行った。一時間も話したのだろうか。「ここまで分村を育ててきたのだから、きつと戻る。」帰りぎわまで開拓団のことを心配している夫との、それが最後の別れとなった。

分村計画を立て、村づくりの中心となってきた板谷団長の応召は、開拓団には大打撃だった。川根在満国民学校の校長だった前川伊勢蔵さん（瀬戸出身）三島市にお住いでいたが、昨秋おせくなりになりきした。は、当時を振り返って語る。

「板谷君が抜けて、団はほっかりと穴があいた。団がまとまりにくくなった。責任者がいるの、いないのとは大きな違いだ。」
団長代理が選ばれるたびに召集され、敗戦までに三人もが交代した。慌ただしさは日増しに高まっていった。

日本の戦局が悪化していることは、開拓団にはいっさい知らされなかった。が、うすうすと感じ始めている団員もいた。

大西林平さん（水川）もその一人だ。十九年正月、大西さんは近くの親しい中国人の家に避難に行った。「日本は戦争に負ける。家族を早く団に帰した方がいい」と、その中国人は言う。大西さんが理由を尋ねると「日本系通貨の価値が下がり

不安 高まるごと日 男のとなのおす消 次女

共産軍のは上がっているからだ。」「まさか、
と思いつながら、不安感も消せなかった。

団員の馬が何者かに盗まれるようになったのもそのころからだ。日本人に反感を
持つ中国人の仕わざ、といううわさだった。
『東洋鬼』、侵略的な日本人と雪に書
かれてゐるのを目にした団員もいる。

応召者はさらに増え、二十年になると、
開拓団にはおとなの男がほとんどいなくな
った。教員にも、医者にも、召集はかか
った。残るのは婦人と子供、老人ばかり
になった。

現地召集は川根開拓団だけでなく、
満州全土の日本人の間で進んでいた。戦
局の悪化で南方へ回された関東軍の
精鋭部隊を補充するためだった。

二十年五月、男子を失って弱体化した
開拓団の警備対策として、隣り合わせ
の開拓団同士を合併することが決ま
った。浜松市中心の浜松郷、静岡中心
の駿府開拓団の一部が、川根開拓団に
移住して来た。ソ連が「日ソ中立条
約は延長しない」と通告して来たの
がこのころだった。

もはや非常事態だった。団員の
不安は高まり、開墾どころではな
くなっていった。



朝日新聞 静岡地方版発行

静岡の戦争「もう一つの中川根村」

次回号へ続きます。

内容は脱出、難民生活など……

より



“思い出す なつかしきひとびと”

又、こしも、お正月に、同窓会がひらかれました。

180～190人の顔々… 知っている人が見つかるかも。



昭和19年から20年生まれの方々、46歳ぐらい。 恩師3段目中央 川井 勇先生



昭和10年から11年生まれの方々、55歳ぐらい。 恩師3段目中央 川 沢 英 夫 先生
中 村 富 夫 先生



昭和3年から4年生まれの方々。62歳くらい。
皆美しく年を重ねました。が若い日々に帰りました。



どこかで春が生まれてる。早咲きの梅がこんなに開いて

定期講読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 年共 150円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回(季刊誌)の発行を予定しております。

今回で購読期間の切れる方に、郵便振替用紙を同封致しますから、引き続きご購読をお願いします。

年間予約600円のご送金をおすすめしますが、2・3年分のご予約も賜ります。購読期間が切れて半年以上ご連絡が無い場合は勝手ながら中止とさせていただきます。

住所変更のおりも是非ご連絡下さい。

※問い合わせ先

TEL 0547-56-0015
小沢節子

※払込通知票

口座番号 名古屋<7>-81556
加入者名 中川根ふる里通信係

お知らせ

焼津地区に「川根会」が昭和61年に発足されました。川根三町出身の方でつくられており

昨秋は伊豆方面へ懇親旅行へ行ってきました。

会長さんは 長嶋初雄さん (田野口出身)

TEL 628-8490

未入会の方はお申し込みされてはいかがでしょうか。

(又保尾出身)

写真及情報提供 水口剛男さん



松谷みよ子さんの児童文学書に『花いっばいになあれ』があります。ある小学校の児童達が風船に花の種をつけて飛ばしました。『花いっばいになあれ』という。風船(ゴキ)ははるか遠くの山の原につきましました。すぐにキツネのゴンが見つけました。ゴンは赤い風船が花だと思って植えてやり、水もかけてやりました。「ステキな花だね」。ゴンはとても幸せな気持ちになりました。あくる朝、ゴンは花を見に行きました。風船の花はしぼんでいきました。ゴンはかなしく、ワーワー泣きました。

——そして一年はたった夏の日、ゴンは花のあった所へ行ってみました。黄色い大きな花がいっばい咲いていました。ゴンはうれしくなって、あたりをのけまわりました。黄色い花は、ひまわりで、それから何年も咲き続けたとの事です。

四季の里の藤森さんも、芽がはて根をほり、葉を付け、茎を伸ゆり、みごと花が咲いたとおっしゃっております。どうぞ皆様、今後とも、ふる里、中川根を時々思い出して、足とはこんで下さい。

ふる里通信もゴンのひまわりの様に全国あちろちろに根付き、葉を、茎を伸ばして行きたいと、今後とも努力していく所存でございます。中川根出身の友人知人の方々で、まだふる里通信がといていない方があり、コーナーは是非ご一報下さい。お届けしたいと考えます。

同窓会の写真の中に、中川根ふる里通信係、小沢節子が写っております。十ページ上写真、前から三列左から四人目がそうです。(中川根中第十三回卒)ご笑見いただければ幸いです。



☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆